

研究ノート

## 高大連携プログラムの効果に関する検証Ⅱ —デパートサミット・ゆにまる経験者への聞き取り調査を中心に—

大野 整・白戸 洋・畑井 治文・向井 健

An Analysis of the "University- High School Cooperation Program Ⅱ":  
Focusing on Interviews with Participants in the  
"Department Summit" and/or "YUNIMARU"

OHNO Hitoshi, SHIRATO Hiroshi, HATAI Harufumi, MUKAI Ken

### 要 旨

長野県商業教育研究会が主催するデパートサミットは、県内の商業高校や農業高校が松本大学と連携して学ぶ地域人材の育成を目的とした高大連携教育であり、2013年から実施している。本稿は、この高大連携プログラムに参加した松本大学・松本大学松商短期大学部の学生を対象とした聞き取り調査を行い、その成果と高大連携プログラムの意義について明らかにしようとする中間報告である。聞き取り調査を通して、高大連携プログラムに参加した学生は、①基本姿勢の変化、②学習意欲・学習内容に対する興味の変化、③地域に対する印象・理解の変化、④性格・行動パターンの変化、という4つの観点において、いずれもポジティブな変化をみせていることがわかった。こうした結果をふまえ、高大連携プログラムの意義について予備的な検討を行い、今後の研究に向けて仮説を提起する。

### キーワード

人材育成 高大連携 商業教育 地域学習 教育効果

### 目 次

- I. はじめに
- II. デパートサミット・ゆにまる経験者の成長
- III. ゆにまる経験者の成長
- IV. 高大連携プログラムの教育効果に関する研究に向けた仮説の提起

注

# I. はじめに

## 1. デパートサミット・ゆにまるの概要

長野県商業教育研究会が主催するデパートサミットは、県内の商業高校や農業高校が松本大学と連携して学ぶ地域人材の育成を目的とした高大連携教育の新しい形である。その内容は、商品開発などを学ぶマーケティング塾と、その成果を発表するデパートゆにとによって構成されており、松本大学が共催して2013年4月から実施している<sup>注1</sup>。

その目的は地域産業に貢献できる人材の育成、県内外を問わず大学への進学後の地元への就職、次世代の実践的なマーケットターの育成、地域貢献目的意識が高い若者の増加を狙いとしており、高大連携ならではの質の高い学びを心がけている。

デパートサミットが始まって2年が経過した2015年、デパートサミットを経験した松本大学の学生が中心となりデパートサミットの支援を目的とした有志の団体、ゆにまるを発足させた。

当初はデパートサミットOB会としての性格を持った学生の集まりであったが、徐々に高校生のサポートにとどまらず、独自の活動を展開するようになった。また加入する学生もデパートサミットの経験者だけではなく、地域活動に興味を持った普通高校の出身者も加わり、多様な視点で高校生と切磋琢磨しながら学びを高めていった。

表1のようにゆにまるに参加した学生は、出身高校もデパートサミットの経験の有無も所属学部も様々である。そのような多様な環境の学生が参加することで、次に述べるようにその活動も当初より幅広い内容へと変化した。

### 1) ゆにまるの活動内容

当初、ゆにまるはデパートサミットを経験した学生が中心となって発足したため、その目的はデパートサミットの支援が目的であった。そのため活動内容は、マーケティング塾のアシストとデパートゆにとへの参加に限定されていた。

2015年度末に松本市の奈川地区のかぶ・山辺

表1 ゆにまる参加者の人数の内訳

2018年4月末現在

		2015年	2016年	2017年	2018年
出身高校別	商業高校	9	12	13	12
	農業高校	0	0	0	3
	普通高校（都市部校）	1	2	2	2
	普通高校（地域校）	2	3	3	1
デパートサミット 経験の有無	デパートサミット経験者	8	11	12	13
	デパートサミット未経験者	4	6	6	5
所属学部別	人間健康・健康栄養	1	1	1	1
	総合経営・総合経営	9	10	8	7
	総合経営・観光ホスピタリティ	2	4	6	8
	短期大・経営情報	0	2	3	2
学年別	1学年	5	5	4	5
	2学年	6	5	5	6
	3学年		7	3	4
	4学年	1		6	3
男女比	男	8	8	9	6
	女	4	9	9	12
	合計	12	17	18	18

総合学科商業分野は商業高校に含む

地区のぶどうに関わる商品開発を扱ったことをきっかけに、ゆにまるの活動は地域資源の活用や地域との連携活動へと広がった。学部垣根を越えた有志による活動は、自主性が尊重されるため指示されて行う活動は少ない。そのことは自ら学ぼうとする意欲的な学生には適していた。そのようなメンバーを中心に、ゆにまるの活動範囲は下の表2のように多様になった。

ゆにまるの活動は、3年を経過する中で「地域連携」と「高大連携」を軸として動き出している。

その2つのキーワードの中から、今後更に新たなプロジェクトが生まれてくることが期待される。そのためには学生の自主的な活動を保障しながらも、その活動が彼らにとって意義のある学びに醸成されていく環境をつくるのが課題である。

## 2) ゆにまる参加者と高大連携の関わり

ゆにまるの発足の経緯を踏まえ、ゆにまるに加わった学生を高大連携との関わりから大別すると、以下の表3のように分けられる。

表2 ゆにまるの主な活動内容

	2015年度	2016年度	2017年度
マーケティング塾	アシスタント ファシリテータ 計4回(2015のみ)	アシスタント ファシリテータ 計8回(2015~2016)	アシスタント ファシリテータ 計8回(2016~2017)
デパート ゆにっと	(販売活動) 山賊まぶし丼	(販売活動) 城下町のおごっつお	(イベント活動) 松本市古い街並み写真展 学校のお宝展
バレンタイン スーツ	(販売活動) 日本酒チョコレート 奈川のびー 山辺の彩	(販売活動) みそぱんの恋 日本酒チョコレート	(販売活動) コンフィチュール(レカルトグラム)
商品開発	奈川のびー(1月) 山辺の彩(1月)	オレンジ弁当(6月) みそぱんの恋(1月)	あずみの夏イチゴ研究会 (10月発足)
地域連携活動			松本市の昔の写真の整理 (松本商工会議所) 上土商店街の支援交流活動
各種研修会の 参加及び自主 研修	MG(マネジメントゲーム)研修 地域産品デザイン講座	MG(マネジメントゲーム)研修 地域産品デザイン講座	MG(マネジメントゲーム)研修 (高校生の生徒実習のサポート) 簿記自主学習(2・3級 合格1名)

表3 ゆにまる参加者と高大連携の関わり

出身高校との関係	3年間		2018年度 メンバー
	高校	大学・短大	
デパートサミット経験 高大型		→	11名
デパートサミット経験 高短大型		→	2名
デパートサミット未経験 大学型		→	4名
デパートサミット未経験 短大型		→	なし
その他		→	1名

多くは高校時代にデパートサミットを経験し、大学でその活動を継続するためにゆにまるに入った学生であるが、高校時代の経験に関わりなく活動に参加するものも増えている。また、教職を目指している学生が編入などで途中から活動に加わる事例もその他として存在する。

## 2. デパートサミット経験者のその後 ～各高校の進路データから分析できること～

デパートサミットは5年を経過したが、この活動に参加した高校生はその後どのような進路を選択したのだろうか。5年間すべてに参加している、長野商業高校・諏訪実業高校・辰野高校・

飯田OIDE長姫高校の4校について、2013年から2017年までの5年間の進路状況を集計した。なお、下記の表4ならびに図1は、デパートサミット参加校に対して、2018年3月に担当者に依頼し実施をした「進路調査」より、4校のデータを抜粋したものである。

表4が示すとおり4校の商業科の卒業生は、5年間で2,368名にのぼるが、県内へ進路を選択した者は68.92%である。このうちデパートサミットに参加していた生徒は、76.19%が県内に進路を決めた。

図1は4校の大学進学者全体に占める県内大学への進学者の割合を経年にわたって調べたものである。最近の5年間を見ると、4校全体の県内

表4 4高校の進路状況

(2013年から2017年の累積人数)

	商業科卒業生数		うちデパートサミット経験者	
	県内	県外	県内	県外
4年制大学進学者	74	293	7	7
短期大学進学者	224	69	3	5
専門学校進学者	316	339	10	3
就職者	1018	35	28	0
合計	1632	736	48	15
県内割合	68.92%		76.19%	

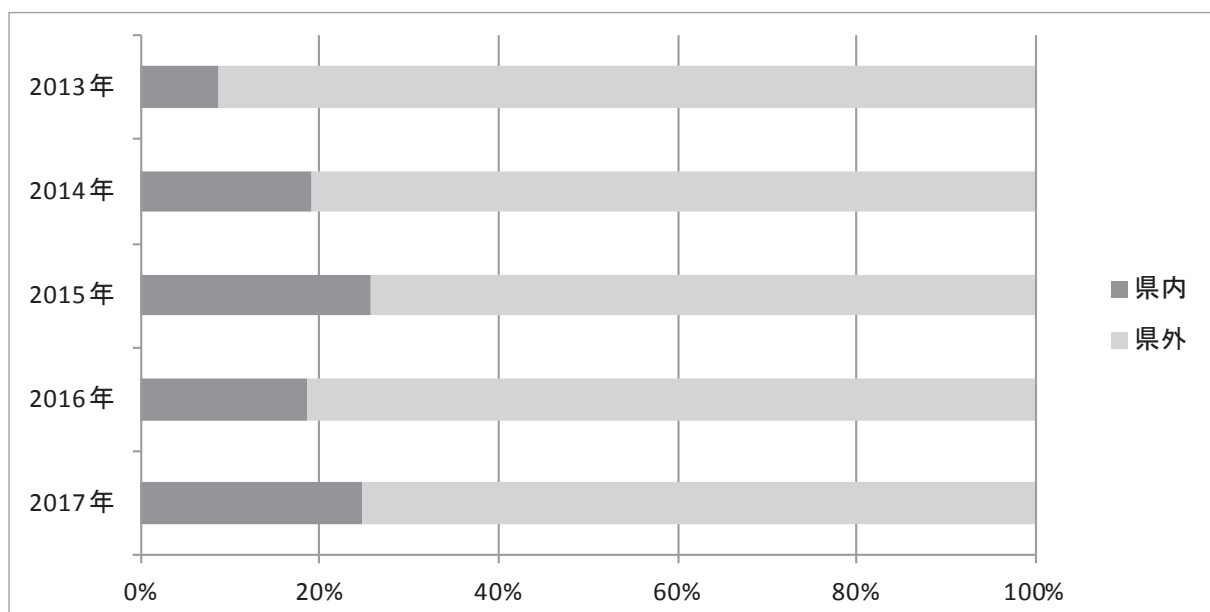


図1. 4高校の県内大学進学者の年度別割合

への大学進学割合は大幅に増加している。なお、デパートサミットに参加した生徒に限ってみると、県内大学への進学者は半数となっている。進学割合については、経済的な要因など様々な要因が絡み合うことが予想されるため、デパートサミットの活動と相関関係にあるとは言えない。また、調査校が4校であるので、対象を広げて分析していく必要があり、加えて県外大学への進学者についてもデパートサミットの経験がもたらした影響を探ることが課題である。

いずれにせよ、デパートサミットの参加者は、参加しない者よりも県内への進路選択意識が高い。今後、参加校全体の進路動向の分析を進めながら、その傾向と内容を分析することが課題である。

### 3. 本稿の目的と構成

2018年3月、高校時代にデパートサミットを経験したことのある学生が初めて松本大学を卒業した。言い換えればゆにまるの活動を行った第1期生である。そこで本稿では、高大連携プログラムが高大7年間、あるいは5年間を通じてどのように機能しているかを大学卒業時点での学生の意識の中から探ることで、その効果を明らかにすることを目的とした。

本稿のⅠ. においてはデパートサミットとゆにまるの関わりを述べるとともに、ゆにまるの活動がどのように変化したのかを探った。またデパートサミットが高校生の進路選択に及ぼした影響を抽出データから分析した。

本題となるⅡ. においては、ゆにまるの活動を行った松本大学・松本大学松商短期大学部の卒業生3名(X君、Y君、Zさん)を対象にした聞き取り調査の結果を分析した。この章では、高大を通して経験した連携プログラムの効果を検証するとともに、特に大学において彼らがどのように変化したかを、①基本姿勢の変化、②学習意

欲・学習内容に対する興味の変化、③地域に対する印象・理解の変化、④性格・行動パターンの変化、という4つの変化を観点として、その効果を明らかにした。その際、高校時代のデパートサミットの経験と大学時代のゆにまるの経験を区別することで、大学時代の変化を明らかにすることに努めた。

Ⅲ. においては、Ⅰ. で述べたようにデパートサミットの経験を持たずにゆにまるに加わる学生がいることに注目し、そのような学生5名(A君、Bさん、Cさん、D君、E君)を中心に聞き取り調査を行い、動機や大学時代の過ごし方などを先の4つの視点に基づき分析を行った。デパートサミットの経験の有無を中心に、双方の立場の学生が切磋琢磨することでどのような効果を及ぼすかを明らかにした。

Ⅳ. においてはこのような実践教育が様々なパターンから教育効果を発揮する可能性を検討し、今後人材育成モデルとしての高大連携プログラムのあり方を検討するための研究に向けた仮説を提起するとともに、今後の研究上の課題について検討を行った。

## Ⅱ. デパートサミット・ゆにまる経験者の成長

本節では、高校時代にデパートサミットを経験し、その後、松本大学・松本大学松商短期大学部に入学し、大学時代に、ゆにまるに参加した3名の学生に対する聞き取り調査の結果をもとに、彼らがどのように成長してきたのかについて、その特徴を整理していくこととする。

### 1. 基本姿勢の変化

～受動的な姿勢から能動的な姿勢、さらにもう一歩先へ～

3名の成長を考える際、彼らの基本姿勢の変化

という視点を欠かすことではきない。まず、X君の場合、高校時代のデパートサミットに参加するきっかけとなった部活動への入部に関しては、自らの意思という訳ではなく、担任の先生からの誘いがあったからということであった。またデパートサミットの活動の際、X君は統率補佐という役回りを担当していたが、これも担任の先生から頼まれて仕方なく引き受けたとのことである。つまり、高校時代のX君は、能動的というよりも、むしろ受動的な姿勢で諸活動に参加していたことがうかがえる。また、松本大学に入学した後、ゆにまるに参加した経緯についても、デパートサミットの際にお世話になった先生への呼びかけに応じたとのことであり、必ずしも能動的な姿勢とは言えないものであった。一方、デパートサミット・ゆにまるで様々な経験を重ねる中で、「次第に実践的な学びの機会が学生にとってプラスになるという考え方を持つようになり、その結果、何事に対しても自発的にアプローチできるようになった」とX君が発言しているように、その後の複数の場面において、能動的な姿勢で課題に取り組むX君の姿が見て取れるようになる。こうした基本姿勢の変化は、その他の学内外の諸活動(例:考房ゆめ主催のアルプスタウン、アルバイトなど)にも好影響を与えている。

次にY君の場合、高校時代のデパートサミットの活動の際、裏方の役回りに徹していた。「同時に2つのプロジェクトに関わっていたのでリーダーを引き受けることは負担が大きいと思っていた、あまり目立つことはしたくないとの気持ちがあった」という発言からもわかるように、Y君は自ら進んで前面に立つのではなく、一歩引いてデパートサミットの活動に関与していた。こうした受動的な姿勢は、松本大学に入学後、大きく変化することとなる。大学入学後、デパートサミットの際にお世話になった先生とY君が話し合うなかで、ゆにまるを結成するプランが

生まれてきた。Y君は、「過去の経験を活かす場として、高校生を支援する大学生組織があっても良いのではと考えていたこと、またデパートサミットは、高校・大学が協同して行っている取り組みであるにもかかわらず、大学生が関わる場がないのはおかしいのではないかと感じていたこともあり、ゆにまるの結成に自ら積極的に関わった」と話していることからわかるように、能動的な姿勢で、ゆにまるの活動に参加することとなる。Y君は、ゆにまるの設立直後から大学卒業時までの約3年間、同団体のリーダーを任されることとなる。「デパートサミット、ゆにまるでの経験は、自ら積極的に物事を乗り越えたいと考えるきっかけを作ってくれた」とY君は話している。また、「誰かから言われてではなく、自らやってみようという考え方の転換は、今後の人生にとって大きなポイントであった」とY君は捉えている。Y君にとっては、ゆにまるの設立こそが、自らの基本姿勢を変化させる大きな契機であり、その後の大学生活を充実させる転換点であったといえよう。

前2者と異なり、Zさんの場合、高校時代から能動的な姿勢で諸活動に取り組んでいることがわかる。所属する高校の実習販売では責任者を担当し、そこでの使命であったオリジナル商品の開発をするために、自ら進んでデパートサミットに2年間参加した。その後、松本大学松商短期大学部に進学した後も、「お世話になったマーケティング塾を手伝えることは、自分にとっても本意である」との考えのもと、特段の迷いなく、ゆにまるに参加したとのことであった。また、Zさんは、ゆにまるの活動以外にも学友会の責任者を担当するなど、自らアグレッシブに諸活動に取り組んできた学生である。ただし、短大生ということもあって、ゆにまるの中では、上級生のサポート役に回ることが多かったようである。「指示される仕事以外もやってみたかった」との発言からもわかるように、元々、能動的な姿勢で

諸活動に取り組んできたZさんは、この間の経験を通じて、さらに一步先のニーズを持っていたことがわかる。

このように、デパートサミット・ゆにまるを中心とした実践的な活動への取り組みを通じて、それぞれが受動的な姿勢から能動的な姿勢へと変化し、さらにはその一步先へと進もうとする姿が見て取れる。デパートサミット・ゆにまるが、こうした変化をもたらす装置として機能し続けるためにも、今回の3名以外(※デパートサミットの経験者で松本大学以外への進路を選択した者)についても追跡調査が必要であると考えている。

## 2. 学習意欲・学習内容に対する興味の変化

次に、表5をもとに、学習意欲・学習内容に対する興味の変化を見ていこう。高校時代のデパートサミットでの経験、大学時代のゆにまるでの経験を通じて、学習意欲・学習内容に対する興味は、3名とも確実に広がっている。ただし、その広がりの方角性は、人によって異なる。X君の場合、高校時代のデパートサミットでの経験の中でマーケティング分野に対する興味が膨らんだとしている。部活動の顧問の先生がマーケティングを専門としていたこともあり、理論的な肉付けをしながら、こうしたら売れるという仮説の検討を繰り返し行ってきた。また、どうやったら売れるのか、どうやったら他の商品との差別化をはかれるのかということ、他の高校生と何度も話し合った経験は何事にも代えがたいものであると感じている。「デパートサミットは、理論と実践の反復を経験できる貴重な機会であった」とX君が振り返っているように、学習意欲・学習内容に対する興味に対してデパートサミットが与えたインパクトは非常に大きい。大学入学後、X君は、マーケティングの一領域であ

る消費者行動に力点を置きながら諸活動に取り組んでいる。商品開発にとっては、地域資源の有無も大切であるが、それ以外に「渡す人の気持ち」などの消費行動に着目することも有用であると考え、それに関連する学習を重ねてきている。このようにX君の興味は、マーケティングというキーワードを軸としながら垂直方向に拡大してきているといえる。

一方、Y君の場合、高校時代のデパートサミットに参加した当初、商品開発から販売までの一連の流れを経験したいという気持ちがベースにあったとのことである。しかし、その後、デパートサミットでの経験を重ねる中で、商品開発に至るまでのストーリー、地域の歴史・文化、商品のプロデュース法など、新たに興味を持ったことが多かったと評価している。大学入学後、Y君は、地域の新たな魅力の伝え方として「まちなみ写真展」の開催、地域資源の掘り起こしに向けた「場」や「仕掛け」の構築などに着眼して活動を進めてきている。Y君の興味は、商品開発というキーワードを出発点としながら水平方向に拡大してきているといえるであろう。

また、Zさんの場合、大学時代のゆにまるの経験の中で高校生など異年齢の者と学びの場を共有することによって、新しい発見が得られ、学びの幅が広がったとし、その結果、色々な場面において経営からマーケティングまで話題を広げられるように変化したと実感している。また第三者に声をかけることに抵抗感がなくなり、例えば、気まずい場面においても、自ら話題のきっかけを作るなどして、相互の関係性を構築できるようになったと話している。デパートサミット・ゆにまるでの経験を通じて生まれた具体的な変化を、Zさんは身をもって感じている。

このように、高校時代のデパートサミットの経験を出発点として、彼らの学習意欲・学習内容に対する興味は大きく広がり始めることになるが、その方向性や感じ方は必ずしも一様ではない。

しかし、いずれにせよ、デパートサミット・ゆにまるを中心とした実践的な活動への取り組みが、学生の学習意欲・学習内容に対する興味に対してポジティブに影響していることは明らかである。今後は、こうした変化の方向性を整理・パターン化することで、デパートサミットのプログラムの充実、ゆにまるの活動のあり方などを再考していくことが必要であると考えている。

### 3. 地域に対する印象・理解の変化

次に、表6をもとに、地域に対する印象・理解の変化を見ていこう。まず3名に共通していえることは、当初から地域に関して強い興味・関心があった訳ではないということである。高校時代のデパートサミットでの経験を通じて、地域のことを知る機会が提供され、3名とも地域資源や地域の魅力について再認識するようになる。さらに、その結果として、“自分自身が生きていく場所”として地域を捉え直すという流れが見て取れる。X君の場合、「当初から地元に残りたいという漠然とした気持ちがあったが、デパートサミットでの活動を通じて、その気持ちが顕在化してきたように感じている」と表現されており、

Y君の場合、「デパートサミットでの活動を通じて、(中略)、自分の足元をしっかりと見られるようになったのは、今後の人生にとって大きな分岐点であったと感じている」と発言されている。またZさんの場合、「地域のことがよくわかるにつれ地方公務員として働きたいという気持ちが芽生え、実際に高校卒業時に合わせて公務員試験に挑戦した」ことも明らかにされている。

さらに、3名のその後を見ると、大学時代のゆにまるでの経験を通じて、地域に対する印象・理解がもう一段深化しているように感じられる。具体的には、地域を多面的に捉えるようになり、人的交流を重ねる中で地域への愛着が醸成され、その結果、それぞれが地域に対する自分なりの関わり方を模索するという姿が浮かび上がってくる。X君の場合、客観的視点(外部からの視点)で地域を捉えることの大切さを認識した上で、地域に埋もれた資源を発信したいとの考え方から、お土産の商品開発に携われる企業への就職を決めた。Y君の場合、地域の歴史、イベントに至るまでのプロセス、地域で暮らす方々の日常など、多様な側面から地域を捉え直し、地域に対する学びを深める職場として「松本市地域づくりインターン」を選択<sup>註2</sup>している。さらにZさん

表5 学習意欲・学習内容に対する興味の変化(デパートサミット・ゆにまる経験者)

	高校時代/デパートサミットでの経験	大学時代/ゆにまるでの経験
X君	<ul style="list-style-type: none"> <li>*マーケティング分野に対する学習意欲の向上</li> <li>⇒理論の学習、仮説の検討</li> <li>⇒デパートサミットは理論と実践の反復の場という位置づけ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*“人の心の動き”に着眼した消費行動に関する研究を追求</li> <li>*徹底したリサーチを前提に、課題に対するアプローチを考える学習スタイルの確立</li> </ul>
Y君	<ul style="list-style-type: none"> <li>*商品開発から販売までの一連の流れを経験したいという気持ちが出発点</li> <li>*商品開発に至るまでのストーリー、その背景にある地域の歴史・文化、商品のプロデュース法などへの興味・関心の広がり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*「商品開発=食べ物を作って売る」という固定観念からの解放</li> <li>⇒地域資源の魅力の伝え方は、商品開発だけに依存するものではないということの気づき</li> <li>*地域資源の掘り起こしに向けた「場」や「仕掛け」の構築などに着眼</li> </ul>
Zさん	<ul style="list-style-type: none"> <li>*高校では学べない内容(商品のレイアウト、カラーマーケティングなど)の学習、それを活かした実践販売</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*ゆにまるの活動を通じて、高校生などの関わる中で、新しい発見が得られ、学びの幅が拡大</li> <li>⇒経営からマーケティングまで色々な場面で話題を広げられるように変化</li> <li>⇒第三者に声をかけることの抵抗感が減少</li> </ul>



の場合、デパートサミット・ゆにまるでの経験を通じて培われた社交的な性格を評価してもらったことが決め手となり、地元の会計事務所で勤務することとなった。

このように、デパートサミット・ゆにまるという一貫した経験から、彼らの地域に対する印象・理解は、ほぼ同様のプロセスをたどる形で段階的に変化してきていることがうかがえる。こうした“地元志向の高まり”ともいえる変化は、地域人材の育成という意味において非常に大きな意味を持っているといえるだろう。

#### 4. 性格・行動パターンの変化

最後に、3名の性格・行動パターンの変化を見ていこう。X君の場合、高校時代のデパートサミットの活動を通じて、特に「既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決法を考えるようになった」、「ストレスを感じることもあったが、成長の機会だとポジティブに捉えるようになった」と評価している。デパートサミットの活動に際しては、高校の先生から、商品開発の企画段階で「ありきたりのものは、作っても意味ないか

ら」と繰り返し言われてきた。また自らの企画についてリサーチをすると、既に同じ物がある場合も多く、その際、何を目的とするかを全ての出発点とするようにと何度も指導されてきた。企画段階では沢山の試作品がNGになるようなことも経験し、その際、どのように発想を変えれば、商品を差別化できるのかと追求するようになったとのことである。こうした経験が自らの性格・行動パターンに影響を与えたのであろうとX君は指摘している。また大学時代のゆにまるでの活動では、高校時代と違って、他の方々と協力しなければならない範囲が広がったので、自分から積極的に他者に働きかけることを意識するようになったと話している。さらに、一つひとつの仕事に対する責任度も増したので、自らの不安を消すために、より積極的に行動するように変化したとのことである。総じて、性格・行動パターンについては、ポジティブに変化したと評価している。

Y君の場合、肯定的な評価と否定的な評価が混在していることがわかる。Y君は、元々、自分はいい加減な性格であったが、高校時代のデパートサミットでの活動を通じて、自分の責任が及

表6 地域に対する印象・理解の変化(デパートサミット・ゆにまる経験者)

	高校時代/デパートサミットでの経験	大学時代/ゆにまるでの経験
X君	<ul style="list-style-type: none"> <li>*地域の魅力について再認識</li> <li>*地元に残りたいという気持ちが顕在化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*客観的視点(外部からの視点)で地域を捉えることの大切さを認識</li> <li>*地域に埋もれた資源を発信したい</li> <li>⇒お土産の商品開発に携われる企業への就職</li> </ul>
Y君	<ul style="list-style-type: none"> <li>*「地域=イベントの場」という捉え方</li> <li>*沢山の地域資源について再認識、情報発信の必要性を認識</li> <li>*県外志向から地元志向へと変化</li> <li>⇒自らの足元に目を向ける契機</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*地域の歴史、イベントに至るまでのプロセス、地域で暮らす方々の日常など、多様な側面から地域を捉えるように</li> <li>*地域に対する学びの深化を希望</li> <li>⇒アクティブラーニングを受け入れる地域側のことを学びたいと考え、「松本市地域づくりインターン」を選択</li> </ul>
Zさん	<ul style="list-style-type: none"> <li>*地域について特段の興味があったわけではないが、地域のことを知る良いきっかけに</li> <li>*地方公務員として働きたいという意識の芽生え</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*地域での活動を通じて、人的ネットワークが拡大し、その結果、地域への愛着と興味が増加</li> <li>*デパートサミット・ゆにまるでの経験を通じて培われた社交的な性格を評価してもらったことが決め手となり、地元の会計事務所への就職</li> </ul>

ぶ範囲に関しては、しっかりと物事に取り組めるようになったと評価している。デパートサミットの活動に参加する前は、何をしてもそれほど周囲に大きな影響を与えることはなかったが、活動に参加した後は、外との繋がり、責任の発生、自分の問題だけでは済まされないことなどが多数生じてきた。そのことが、前述の変化に繋がったと考えている。一方、自分の考え方を他人に対して押し付けるようになってしまった点は、好ましくないと評価している。例えば、他の人が責任を果たさない事案に対して怒ってしまい、「必要最低限のことはやるべきではないの?」という自分の考え方を無理に押し付けてしまうようになってしまった。責任感の裏返しとも考えられる部分ではあるが、Y君としては、この点を直したいと感じているようだ。また大学時代のゆにまるでの活動では、昔は面白いが、面白くないかという視点だけで物事を判断していたが、これまでの経験を通じて、地域活動は単純でないことを理解したと話している。物事を前進させるためには、自分達の思いだけでなく、地域で暮らす方々の思いにも心を配らなければならないということを再認識できたのは、自分にとって大きな収穫であったとしている。しかし、その結果、余計なことまで考え過ぎるようになり、柔軟性が失われて、保守的になってしまったのではないかとY君は感じている。Y君は、これまでの活動を通じて、欠点も含めて、自らの性格・行動パターンを冷静に見つめ直している。その「モノサシ」を獲得できたことも、立派な成長の証のように思われる。

Zさんの場合、高校時代のデパートサミットでの活動を通じて、リーダーシップが身についたとしている。また、デパートサミットでは、知らない人と当たり前話すことが求められ、誰とでも話ができるだけでなく、聴く力も備わったと評価している。そのことは企業の人や目上の人と話す際にも有用であると感じているとのこ

とであった。また大学時代のゆにまるでの活動を通じて、「色々な人がいることを知り、多様な価値観に対して我慢強くなった」と話している。ゆにまるでの活動は、異年齢交流を前提とした価値観のぶつかり合いの場である。Zさんの「我慢強くなった」という一言から、同年代教育の場だけでは養うことが難しい“本当の意味での協調性”が培われていることがうかがえる。

このように、デパートサミット・ゆにまるという活動の中で、3名それぞれは“デパートサミットという共通のモノサシ”を用いながら、自分の性格・行動パターンの変化を的確に認識している。自らの性格・行動パターンを客観的に分析し、自分の成長を冷静に判断することができるのは、教育上、非常に意義が大きい。ここに高校から大学まで一貫した取り組みであるデパートサミット・ゆにまるが有する具体的な教育効果の一端があるものと思われる。今後も同様の聞き取り調査を重ねることで、高大連携プログラムの効果に関する検証を続けていく必要があるだろう。

### Ⅲ. ゆにまる経験者の成長

本節では、高校時代にデパートサミットの経験を持たず、松本大学もしくは松本大学松商短期大学部に入学した後、ゆにまるに加わった学生に注目をする。そのようなカテゴリーに属する学生が、どのような動機で、ゆにまるに参加をし、大学時代をどのように過ごしたかを見ていくこととしたい。なお、本節の記述においては、このカテゴリーに該当する5名の学生に対して、前節と同様、①基本姿勢の変化、②学習意欲・学習内容に対する興味の変化、③地域に対する印象・理解の変化、④性格・行動パターンの変化、という4つの変化を観点としながら、聞き取り調査の結果をもとに、学生たちの成長の特徴を整理していくこととする。

## 1. 基本姿勢の変化

はじめに、基本姿勢の変化という視点から見ていくこととしたい。聞き取り調査を行った中でこのカテゴリーに該当する者は、①「出身高校がデパートサミット参加校でなかった者」と、②「デパートサミット参加校ではあるが参加していなかった者」との2通りのパターンがある。

まず、A君の場合は「デパートサミットの参加校であるが参加していなかった」というひとりである。というのもA君の出身高校においてデパートサミットの主たる参加コースは、商業系のコースに限られており、他のコース所属であったA君は、参加することができなかった。そもそも大学入学以前の段階においてデパートサミットの存在を知らなかったとのことであった。そのようなA君がゆにまるに参加する初発の契機となったのは、大学入学後、既に高校時代にデパートサミットを経験していた友人のY君からの誘いをきっかけとしている。デパートサミットの話聞いて「県内の商業を学ぶ高校生がどのようなことを学び考えているのかを知りたい」といった「ちょっとした興味」を抱いたことが参加のきっかけとなっていた。地元の村役場に勤めることが希望としてあったA君はゆにまるに参加する中で、ここでの学びを、自らの地元の村の地域活性化に活かしていくための学びの場として位置づけ、意欲的に活動をするようになっていった。そのような変化は、A君の「帰ってから、村のPRをどのようにしていくのか」という仕事のことを考えた時、このようなゆにまるで学んだところが参考になってくるのではないかと考えるようになった」という語りからも見て取ることができ、ゆにまるでの活動を前向きに位置づけ直そうとしている。

松本大学松商短期大学部に通うBさんの出身高校でも、デパートサミットの活動が行われているが、高校生の頃は参加していなかった方で

ある。Bさんは、自分のことを「人と話すことが苦手」と自己評価をしていたために、高校時代においてデパートサミットの活動に参加するというような勇気はなかったという。短期大学に入学後、松本大学の中にデパートサミットを支援する団体ができたことを聞き、「新しいことにチャレンジしたかった」と、「人との関わりを作りたかった」ということから、友人とともに、ゆにまるの活動に参加した。Bさんは、ゆにまるに参加をする中で、マーケティング塾に参加する自分自身より年下の高校生に教える機会を得られ、異年齢の交流がはかれる場であることに意味を見出していった。そのような異年齢で学びあう中で活躍をすることができる機会が設けられたのは、ゆにまるの効果であった。

それに対して、Cさん、D君、E君は、デパートサミット参加校ではない長野県内の普通科の高校出身の方である。これらのメンバーは、A君と同様に、松本大学入学後、友人となった「Y君の誘い」がきっかけとなり、デパートサミットの存在を知って関わるようになっている。

Cさんは、普通科高校出身であるがゆえに、高校時代にとりわけ商業や経営に関する専門科目を学習してきたわけではなかった。さらには、大学進学を選択にあたって、福祉分野の関心が強く、観光ホスピタリティ学科において社会福祉士の資格が取得できることから、松本大学に進学をしている。そのため、はじめは商業や経営に関する科目は「大学の必修科目として置かれているから学んでいた」と語るように、当初から関心が高かったわけではなかった。ゆにまるへの参加のきっかけも「友人のY君からの誘い」という、どちらかといえば受動的な要因がきっかけとなっていた。しかし、Cさんは、ゆにまるでの活動を通して、「商業や簿記にかかわる学びが福祉分野にも応用できるのではないかと考えるようになった」と語っている。つまりは、狭く福祉の学びを捉えるだけではなく、福祉に対して、

マネジメントの視点を導入して考えながら、学びの幅を広げて捉えなおそうとしている様子が見て取れる。結果として、このようなCさんの認識は、大学での経営や簿記の学びへの意欲を深めていくことにもつながり、資格検定にも挑戦し、日商簿記の2級の合格を果たしている。

D君も、県内の普通科の高校から松本大学に進学した方であり、高校時代にはデパートサミットを経験していない。ゆにまるに関わるきっかけは、松本大学に入学した後にゆにまる経験者のY君と仲良くなったことから、他の仲間が参加するのに巻き込まれるように種々の活動に取り組み始めることになった。どちらかといえばD君自身のゆにまるでの参加の動機は、「友人との関わりあい」に力点が置かれていたが、ゆにまるでの活動を通して接客をする経験ができたり、商品開発に取り組みたりしたことには意味を見出していた。D君自身は「コミュニケーションをとるのが苦手で、他の人から誤解を受けやすいところがある」と自己評価をしていたが、ゆにまるの活動を通して、周囲の友人関係に恵まれ、高校生をはじめとする多様な世代の人たちともコミュニケーションをとる機会を持つことができていた。

E君は、長野県内の地域キャンパス校の高校出身である。この高校もデパートサミット参加校ではなく、デパートサミットの存在は大学1年次に入学後のウエルカムパーティで友人となったデパートサミットの修了生のY君から教えてもらった。その後、課題解決型の講義(地域課題研究A)の活動からの流れでマーケティング塾にも関わり、2年次に結成された、ゆにまるに参加するようになった。E君は、大学2年の時に長野県の中山間地にある母親の実家が空き家となったことから、将来、その空き家に住んで生きていきたいと考えるようになった。中山間地で生きていくためには、そこで取れる農産物の販売や地域資源の商品化などの知識が必要なので

はないかと考え、ゆにまるでの活動を通して、商品の企画から販売するまでの流れを体感し、商品を売り出すための具体的なマーケティング手法や接客手法を学びたいと思うようになった。ゆにまるでは、高校生の学習を支援するなどの活動に取り組む中で、「自分自身のやるべきことが具体的に見えてきた」と語る。しかしながら、E君は「やる時にきちんとやった」が、全体として自分たちの学年はリーダーの動きに流されてしまったために、「主体的な役割を果たしたというよりは、一歩引いて全体的に動きを俯瞰して必要なことをやったという印象」が残っていると厳しく自己評価をしている。というのも、E君は「大学3年の後半から、(母親の実家のある)中山間地に住むことに向けて具体的にきちんと学んでいかなければいけないという危機感が生まれ、学生生活もただ過ごしていたのでは無駄と考えるもっときちんとやりたいと思った」からだと言っている。

これらの聞き取り調査を通して、大学に入ってからゆにまるに参加したケースの場合、高校時代までにデパートサミットを知らないことが多く、既にデパートサミットの事を知っている友人からの誘いがきっかけとなる場合が多い。友人との仲間関係の中で活動をし始めたとしても、その活動の意味を自分自身の中で位置づけ直し、活動する動機付けの再設定がなされていた時、これらの活動と自分自身の将来像とが連続した学びの場になっていくことが見て取ることができる。

## 2. 学習意欲・学習内容に対する興味の変化

続いて、表7をもとに、学習意欲・学習内容に対する興味の変化を見ていくこととしよう。こちらでも聞き取り調査の結果から、大学時代のゆにまるでの経験を通じて、学習意欲・学習内容に対

する興味が多様な形で広がっている様子が見て取れた。

A君の場合、長野県内にある地域特産品やそれらをマーケティングの手法を用いて地域の活性化につなげていく方法に着目をして学びを深めていた。とりわけデパートサミットでは商業科出身の高校生が独自の発想で地元の特産品を商品化しており、多面的なものを見方をしていくことの重要性を感じていた。また自分自身の出身の村の地域資源のPRをしていく方法についてもどのようにしていけばいいのか、高校生と一緒に考えていた。

Bさんの場合は、ゆにまるでの商品開発での「実践」と、短期大学内でのマーケティングに関する「講義」とを重ね合わせることで理解を深めていた。さらには、ゆにまるで取り組んだマネジメント・ゲームなどを通じて経営の分野にも興味をひろげていた。ゆにまるの活動自体は大学の授業を意識して行われているものではないが、ゆにまるの活動を行うことを通して、帰納的教育と演繹的教育とが経験できるシステムが自然と出来上がりつつあったと思われる。

Cさんの場合においては、ゆにまるでの活動を通して福祉をマネジメントの視点で捉えていくことに対して関心を向けている。デパートサ

ミットでは、ニーズを調査し、ニーズに合った事業を計画・実施、PRをしていく方法を学ぶ。このような方法は住民のニーズに合った福祉サービスを提供していく上でも重要な視点であり、そうしたアプローチについて実践的に学ぶことができる機会として位置付けて学びを深めていた。

D君は、ゆにまるの活動に対して、様々な人と関わりを持ち、コミュニケーションをとる機会として捉えて、多様な人たちと関わることを通して、コミュニケーション能力の向上のための機会としていた。

E君は、ゆにまるに参加することを通して、地域の資源を活かした商品開発・販売の一連の流れを体感することに意義を見出している。特に、地域の中から資源を見出す視点について関心を持っている。ゆにまるでの活動を通して、山辺のぶどうの商品化、松本を舞台にした漫画の聖地巡礼の観光客を対象とした「オレンジ弁当」の開発、日本酒チョコレートなどに取り組む中で、地域の特産品や名産品、文化的なものなどを掘り起こして活かす体験ができた。自分がやるべきことが見えてきたことで、ゆにまるの活動も自分なりの意義を感じることもできた。ゆにまるの活動についても、そのような問題意識を持って臨んだ。

表7 学習意欲・学習内容に対する興味の変化(ゆにまる経験者)

	大学時代/ゆにまるでの経験
A君	*県内の魅力ある地域資源の豊富さに気づく ⇒地域の地域特産品をマーケティングの手法を用いてPRし、地域活性化につなげていく方法について関心を持つ
Bさん	*ゆにまるでの実践と、短期大学部でのマーケティングに関する講義とを重ね合わせることで理解 ⇒実践と理論の往還の中で、マーケティングに関心を持つ
Cさん	*「福祉の学びに経営や簿記は関係ない」という固定観念からの解放 ⇒地域のニーズをつかみ、住民のニーズにあった福祉サービスを提供していくためには、マネジメントの視点が重要であるという気づき
D君	*他者とのコミュニケーションへの苦手意識 ⇒多様な人たちと関わる、ゆにまるの活動の特性を活かし、コミュニケーション能力の向上を図る
E君	*中山間地の中で生きていきたいとの思い ⇒地域の中に資源を見出す方法や地域資源を活かした商品開発・販売の一連の流れを体感することに関心

### 3. 地域に対する印象・理解の変化

それでは、次に、表8をもとに、地域に対する印象・理解の変化を見てみることにしたい。

南信の村落部で生まれ育ってきたA君は、ゆにまるに参加する以前から、「自分の生まれ育った出身の村に戻って働きたい」という気持ちを持ち、比較的、地元志向の強かった学生である。そのようなA君は次のように地域に対する印象について語っている。「デパートサミットには、様々な高校が長野県内の色々なところから来ていて、色々な地域のことを知ることができた。これまでは県内を移動する際に近くを通っても、何の気なしに素通りしていた場所が違っただけに見えるようになった。この場所にはこんなことで頑張っている高校生がいると浮かんだり、ここには地域の魅力ある特産品があることを知ることができたりした」。このように、ゆにまるでの活動を通して、県内の高校生や高校教員とのかかわりができてくる中で、「自分自身の所属する場所」としての地域認識が、県内全域の広がりをもった場所へと広がってきている様子を見て取ることができる。そしてA君はかねてより志望していた地元の村役場に勤務することが決まり、ゆにまるでの学びを活かして地元の村の地域振興に活躍してくれることが期待される。

それに対して、はじめネガティブなイメージを持っていた地域に対する認識が住民との具体的な関わりを通してポジティブなものへと大きく転換していったケースといえるのがE君の事例である。高校入学以前のE君は、学校での友人関係のもつれから、地域の中に自分自身の居場所を見出すことができず、「孤独を感じていた」と語る。そのため、その当時のE君にとって、地域に対してはネガティブな印象を持つものであった。それ故に、E君は、これまでの地域の中での

友人関係を絶ちたいと思い、家から遠く離れた高校に進学することにした。自宅のある地域から離れた高校に進学したE君であったが、彼が進学した高校は高校の所在する地域に積極的に関わった教育実践を展開している「開かれた学校」であった<sup>註3</sup>。そうした、高校での教育実践の中で、新たに地域の人たちと出会いなおし、それまで抱いていた地域に対する反感やアレルギーがなくなっていった。松本大学への入学後は、ゆにまるや、ゼミでの活動を通して地域に深く向き合うことができ、さらに地域に対する視点は大きく変化していくことになる。「自分が地域に働きかければ地域は変わっていき、そして自分にも応えてくれるということが分かった」ことで、E君の地域のイメージはポジティブなものへと転換をしていった。さらには「中山間地の地域には、まだ魅力的で、商品としても十分に通用する財が眠っており、将来、自分が地域でやれることが多くあることが、ゆにまるの活動を通じて見えてきた」と語っている。今後、1年間をかけて、E君は中山間地で生活をしていくために必要となる資格(自動車運転免許、狩猟免許(鉄砲)、ビオトープ管理士)取得に取り組もうと考えている。そして大学卒業後、松本市の地域づくりインターンになり「中山間地における地域づくり」について学び、将来的には、母親の実家の空き家を拠点として、野菜の販売やジビエを活用した起業、炭焼きなどのエネルギーを含めた中山間地での自給自足による地域づくり実践にチャレンジしたいと考えている。

その一方、前述のメンバーと比べて、BさんやD君の事例は、地域に対しては漠然とした認識を持つに留まり、当初から積極的に地域のことに関心をもっていたとは言い難い。しかしながら、ゆにまるでの活動や商品開発の過程の中で、県内各地の特産物や地域の特徴について触れることとなり、Bさんは短期大学卒業後、地元の会計事務所に勤務することが決まっている。またD

君は大学卒業後において、長野県内の地域密着型の販売をしている小売業にて働くことが決まっているが、今後、仕事をしていく上での自信につながっていったのではないかと思われる。

長野県内の進学校出身であるCさんは、自らの進路選択やキャリア形成において長野県に定住する意識はそれほど強くなく、どちらかといえば、「一度、長野県内を離れて生活してみたい」と考えている事例である。また大学卒業後の進路においても、地元を離れて県外の市役所の公務員に勤務することが決まっている。一般的に、進学校であるほど「地域離れ」「大都市志向」が強くなる傾向がある<sup>注4</sup>が、単に長野県のことを全く知らずに地域に対して見切りをつけて外へ出ていくのではなく、地域のことを知ってから県外へと出ていくのでは、その後の地域との関わり方で大きな違いが出てくる。その点において、Cさんは、ゆにまるでの活動を通して、見えていなかった地域の資源やその可能性について再発見をする機会となったことを意識していた。特に、井上百貨店でのパネル展示に関わる中で、かつての松本の町並みの写真パネルを見ながら、町の変遷について詳しい方たちから当時の思い出話を聞くことに楽しさを感じており、「自分の生まれ育った長野県であっても、まだ知らない

ことがあると感じた」と語っており、地元に対する理解や関心を向ける機会になったことがうかがうことができる。

#### 4. 性格・行動パターンの変化

最後に、性格・行動パターンの変化について見ていくこととしたい。ゆにまるに参加する学生にとって、自分たちより年齢が下になる高校生や、県内各地の高校教諭、地元の企業の方たち、松本大学の他学部や他学科の教員や生徒など、多様な人たちとの関わりを持つ機会となっており、そうした環境の中で、周囲の人たちに配慮をする行動がとれるようになっていく様子を見ることが出来る。特に、高校時代においてデパートサミットに参加していない学生たち固有の変化としては、商業を学ぶ高校生による「独自の視点」から刺激を受け、それらを引き出していく行動を意識してとるようになっていくことが挙げられる。

例えば、A君は、ゆにまるでの活動を通して「高校生も自分たちの意見を持ってやっていることがわかるので、強引にこれが正しいということを押しかけて話を進めてしまっはうまいかないことになる。高校生の言いたいことを言え

表8 地域に対する印象・理解の変化(ゆにまる経験者)

	大学時代/ゆにまるでの経験
A君	*ゆにまるの活動を通して、多様な仲間が長野県内に広がる ⇒「自分自身の所属する場所」が、県内全域の広がりをもった場所へと広がる ⇒地元の村役場に公務員として就職することが決まる。
Bさん	*地元で働くことに対する安心感や、仕事をしていく上での自信を得る ⇒ゆにまるを通して自己理解を深め、地元の会計事務所に就職が決まる。
Cさん	*今まで知っている気になっていた地域の資源や魅力を改めて再発見 ⇒県外の市役所への就職が決まるが、長野県に対するイメージは良くなる。
D君	*地域に対する関心は漠然としていたが、地域の資源に目が行くように ⇒長野県内の地域密着型の店舗経営をしている小売業に就職が決まる。
E君	*地域に対するネガティブなイメージが、地域住民との出会い直しの中で、ポジティブなものへと変化していくことに ⇒中山間地で生活をしていくための必要なことを身につけ、将来は中山間地にある空き家で自給自足の生活にチャレンジしたいと考えている。

ない雰囲気にしてはダメなのではないかと考えるようになった」「高校生を見守るという行動をとるようになった。それぞれ高校生たちも持っているものがあったりするのだから、それを引き出しやすいようにしていく環境づくりのために雰囲気を作ったり、話を振ったりすることができるような感じにはなれたかなと思っています」と語っている。さらには、このような周りの方たちへの配慮は、「大学4年になってからは、ゆにまるについても代替わりを意識してタイミングを見ながら関わることを意識してきた」とあるように、同じ大学生の後輩に対しても向けられるようになってきている。

Cさんも、A君と同様に商業の専門課程の中で学ぶ高校生たちの学ぶ環境づくりに配慮を重ねるような行動を取れるようになってきている。商業を学ぶ豊富な知識に刺激を受けながら、高校生のアイデアをどうやって膨らませるかに苦心したり、デパートサミットの主役である高校生をどのように引き立てることができるのかに気を向けたりしていた。また、そのように高校生と一緒に考える時と、同じ、ゆにまるのメンバー同士で活動をする時の切り替えを意識しつつ、ゆにまるのメンバー同士の輪を意識しながら行動をするように心がけていた。

ゆにまるでの活動は、多様な人たちとコミュニケーションをとる機会となる。そうした点においても、「物静かで人見知りをするタイプ」であったBさんに関しては、ゆにまるの活動を通して様々な立場の人たちと関わりを持つ機会とすることで、「消極的な自分自身の行動を変化させ、誰とでも話せる自分になった」と語る。ゆにまるに関わった後のYさんは、人間関係の範囲も広がり、様々な場面で自らの考えをきちんと述べられるようになり、自分に自信を持った行動を取れるようになったとのことであった。

D君も、Bさんと同様に、ゆにまるでの活動を通して多くの人たちとのコミュニケーションを

とる機会としており、そのような活動を通して「顔見知りの人しか話せなかったが、多くの人と話すことでコミュニケーション能力が向上した」と感じていた。

E君は、ゆにまるでの地域活動を通して、他者との関わり方・行動パターンを主体的なものへと変化させていっていた。高校入学前は、「少し大人びた自分であろうと背伸びしていた」そうであるが、高校以降は「もともと人の好き嫌いは強い方であるが、人と意見が合わないときには、相手が変わることを求めるだけではなく、自分自身が考え方を変えたほうが早いということに気がついた」と語り、ゆにまるの活動でも、「人からいろいろと学ぶことができ、うまく物事が進むようになった」とのことであった。

#### IV. 高大連携プログラムの教育効果に関する研究に向けた仮説の提起

本節では、Ⅱ. およびⅢ. で整理された聞き取り調査の結果について、高校時代のデパートサミットと大学におけるゆにまるの活動などの実践教育が、それぞれどのような成果をあげ、高大連携を通じた人材育成モデルとしてどのような意義を持つかについて予備的な検討を行い、今後の研究に向けた仮説を提起した。そのうえで、今後の研究を進めるにあたって、今回の検討から明らかになった研究上の課題について整理を行った。

##### 1. 人材育成モデルとしての高大連携プログラムに関する予備的検討

本稿で取り上げた高大連携プログラムにおける人材育成モデルは、本学が開学以来大学のミッションとして掲げている地域を支える人材を育成することを目的としている。すなわち、将来、



地域社会をリーダーとして支えていく人材を育成することを目的とするもので、地域に関心を持ち、自らの地域における役割を自覚して、地域を支える上で必要となる知識や能力を身につけることをめざすものである。

以上を踏まえて、今回の検討では、2018年3月に松本大学を卒業した大学生および短大生について、①基本姿勢の変化、②学習意欲・学習内容に対する興味の変化、③地域に対する印象・理解の変化、④性格・行動パターンの変化という4つの変化を観点として、高校時代のデパートサミットの経験と大学時代のゆにまるの経験を区分して教育効果について検討を行った。また検討にあたっては、高校時代にデパートサミットに参加して大学時代にゆにまるの活動に携わった学生と大学入学後ゆにまるの活動に参加した学生についての比較を通じて、高校と大学の連携教育の効果についても検討を行った。

## 1)教育効果に関する検討結果の概要

ここでは、聞き取り調査の検証結果から高大連携プログラムの教育効果について前述の4つの変化の観点に基づき検討を行った。なお、短大及び大学前半と後半におけるカリキュラムの内容や学生の成長の度合い等を考慮して、高校時代(デパートサミットに関わった1~3年間)、大学前半(大学1・2年次と短大の2年間)、大学後半(大学3・4年次の2年間)の3つの期間に区分してそれぞれの意義についても比較検討を行った。また、高校時代のデパートサミットを通じた教育効果については、高校生を対象としたアンケート調査の分析結果(大野整他「高大連携プログラムの効果に関する検証」松本大学地域総合研究第18号、2017年7月)も踏まえて検討を行った。検討結果の概要は以下の通りである。

### ①基本姿勢の変化

高校時代のデパートサミットは、生徒たちの創造性が活かされ、他者との協働によって創造

していく学びの場であったことで、生徒の主体的な取り組みを促し、その結果、何事にも積極的に取り組む姿勢が生まれたことが、生徒に対するアンケート調査で明らかになっている<sup>注5</sup>。しかし、今回の聞き取り調査では、デパートサミットへの参加のきっかけや活動全般において、高校の教員の指導などの関与が大きく、生徒の関わりは受動的な関わりであったという認識が示されている。これに対して、大学における活動については、自らがより能動的に関わり、受動的な参加から能動的な参画へ基本姿勢を変化させている。特に、困難な状況においても自らを成長させ、何事にも能動的に考え行動できる基本姿勢が獲得できたと学生自身が自己評価している。すなわち、高校時代の受動的な姿勢が大学においてはより能動的な姿勢へと変化している。

### ②学習意欲・学習内容に対する興味の変化

高校時代のデパートサミットでは、座学から実践的な場での学びへの変化に伴い、地域社会における多様で総合的な現実<sup>注6</sup>に即した学びが展開され、参加した生徒たちの多様な問題関心を喚起することにつながった<sup>注6</sup>。その結果、学びに対する主体性、協働性、創造性が生まれ、簿記やマーケティングなどをより積極的に深く学ぶ商業教育に対する姿勢の変化が生まれるとともに、幅広い学習に対する意欲にもつながった。このような傾向は、大学においても継続され、同様な水平・垂直方向の学びの発展がみられた。

学習意欲・学習内容への興味の変化においては、大学入学時の問題意識や短大と大学前半と大学後半によって差が生じている。短大と大学前半では専門性というよりも、学び自体の動機付けや幅の拡大などの学びの質の向上につながっているのに対して、大学後半では水平・垂直に学びが深化し、専門教育と一体化して進路へ結びついている。短大と大学前半においては、特にゆにまるの活動が学びの動機付けとなっており、地域や社会と接し多様な他者と深くつながるこ

とで学びの幅が広がり、学びが水平・垂直に多様に深化し、その結果、専門教育との相乗効果が生まれた。一方で、大学後半では、卒業後の進路に向き合う中で、自らの将来ビジョンや大学の専門教育と一体となり、より水平・垂直に深化した学びを目的意識に沿って自ら編集・集約し、将来を見据えて目的を持った学びとして、それぞれの具体的な進路に結びついた。

### ③地域に対する印象・理解の変化

高校・大学を通じて地域に対する印象と理解は、大きく多様に変化している。ここでは、地域への視点、地域との関係性、将来の進路と地域の3点について考察を行った。

#### 一地域への視点

高校では、地域に魅力ある資源や人たち、そして地域の具体的な課題に触れて、身近な足元を見つめ直していく学びの経験が、地域そのものへの関心を引き起こすことにつながった<sup>注7</sup>。すなわち、活動を通じて地域の魅力に気づき、地域のポジティブな面に気づき、愛着を持つなど、地域に対する印象の変化から地域に対する理解の変化へと、地域に対する認識を深めた。これに対して、大学では、単に地域の魅力だけではない課題や問題点まで含めた総合的な地域を把握し、高校時代の主観的な視点から客観的な視点に変化させて地域を捉えている。また、短大と大学の最初の2年間では、地域の問題や課題に対する理解が多様で複雑な地域のあり方に気づき、地域に対する理解の深化と自分の問題として地域を捉える当事者性が生まれた。さらに大学3年次からの2年間では、地域の課題に直面し様々な人々とつながりを創りながら、その解決を図る機会が多くなり、その結果、自らの生き方や将来の進路と地域が結びつき、地域の主体としての意識を持つに至っている。

#### 一地域との関係性

高校時代のデパートサミットでは、活動を通じ、自分と商品開発等に関わる企業や協力者、関係

者との1対1の関係が構築され、その出会いを通じた地域との関係が構築された。また「地域」をキーワードにして人と関わることで地元志向が高まった。これに対して、大学では、「ゆにまる」以外の活動も含めた活動により、より多くの地域の人々との出会いや協働を通じて、多様な人的ネットワークを構築した。高校時代が「点と線」の関係だとすれば、大学においては、「面」として地域との関係性を構築している。

#### 一将来の進路と地域

高校時代のデパートサミットを通じ、企業社会のニーズに応じた人材の育成にとどまらず、地域の多様な価値観に触れながら、「個」としての判断や責任を持ちながら取り組むことで、自立を促し、地域を担う主体者としての力をつけることに結び付き<sup>注8</sup>、その結果として、進学や就職において、地元に残る生徒が増加した。一方で、大学では、ゆにまるの活動などを通じ、自分の役割を地域との関係で明確にし、抽象的な「地域(地元)」という捉え方から、「自らが地域社会で生き、そこで役割を果たす」場として、より具体的な地域という捉え方へと変化している。高校では、地元に残りたいという意識の強弱によって、地元か地元外という選択となったが、大学では、地元志向は自らの具体的な進路と結びつき、より自分の問題として地域と向き合っている。

以上から、高校時代のデパートサミットでの経験から獲得した地域に関する漠然とした問題意識や将来ビジョンを大学での学びの中で明確にして進路につなげていることが明らかになった。すなわち、地域に残りたいという意識から、地域に働きかけて自らが生きる場として地域のあり方を実現する能力を獲得しようという意識へと変化がみられる。

### ④性格・行動パターンの変化

高校時代のデパートサミットでは、社会人基礎力である規律性、状況把握力、主体性、計画力など、デパートサミットの実践的な教育の中で、

自らの役割・責任を把握しながら、ミスなく物事を進める術を学習している。その一方で、創造力や働きかけ力については自らの変化を認識している生徒が少ない。また、他校、他地域の高校生、アシスタントの大学生、地域の大人など自分と異なる他者と出会い、関係を構築し、コミュニケーションを図る必要性から、発信力や傾聴力などの人とのコミュニケーションに関わる項目については8割の生徒が変化したと認識しているが、2割の生徒は変化を認識していない<sup>註9</sup>。さらに、ストレスを感じることもあっても、成長の機会だととらえるようになったかという質問についても、15%が変化を認識していない。

これに対して、大学では、高校時代には変化したと認識されなかった性格や行動について、新たに変化させている。最も変化したのは、自己認識を持ち、それを踏まえて行動することができるようになってきている点である。「ゆにまる」や他の活動を通じて、自らの性格を把握し、それを改善させるとともに、欠点を含めて自分の性格や特徴を良い面も悪い面も含めてコントロールしたり活かしたりすることができるようになってきている。さらに性格は性格として、活動や進路のために自分自身の考え方や行動などを環境や他者に合わせて調整して、最適な行動に結び付ける努力をしている。すなわち、活動を通じて「自分の中に成長のものさしがあった」という評価に象徴されるように、自分の性格や特徴を把握して自己認識を深め、それを単に改善するというよりは、状況に合わせ、苦手なことに挑戦したり、我慢したり、実際の行動において他者に配慮し自らを律して、自己認識を踏まえて行動することで、性格を克服して自らのあり方の可能性を拓げる姿勢を獲得している。

また、大学では他者との関わりも大きく変化している。コミュニケーションに関わる性格や行動の変化は、今回の聞き取り調査においては全員が共通して大きく向上したと認識している。

さらに、活動を通じて、ネガティブな他者との関係に直面しても、自らの成長につなげるたくましさや意識を持つようになった。その結果、実際の活動だけでなく「ゆにまる」自体についても、居心地の良さを求めた居場所という位置づけに終始することなく、共通の目的を持った活動を通じて、考え方や意識の異なる多様な人がいることに気づくことで、人間関係を再構築する場として捉えられている。

## 2) 高大連携プログラムの意義に関する予備的な検討と仮説の提起

前述の通り、高校時代と比較して大学において学生がゆにまる等の活動を通じて、様々な点で成長している様子が明らかになった。しかし、デパートサミットとゆにまるなどの大学での実践教育を高大連携プログラムとして一体に捉えると、どのような意義を持つのであろうか。そこで、ここでは、高校時代にデパートサミットに参加して大学に進学してきた学生と大学においてゆにまるの活動に初めて参加した学生の聞き取り調査の結果の比較を通じて、高大連携プログラムとしての意義に関して予備的な検討を行い、今後の研究に向けた仮説として提起したい。

図2は、高校時代のデパートサミットに参加して大学・短大に進学した学生、大学入学後に初めて参加した学生で比較的学习や地域に対する目的意識・意欲が強い学生、大学入学後に初めて参加した学生で比較的目的意識・意欲が弱い学生の3つのケースについて、どのような軌跡で成長を遂げたかについて、聞き取り調査の結果から導き出された関係性を概念化したものである。

大学に入学後ゆにまるに参加した学生のケースについては、Ⅲ. において検証を行ったが、入学時から大学前半において、大学での学習や地域に対する目的意識・意欲を高めた学生のケースは、ゆにまる等の活動を通じて成長を見せている一方で、逆に目的意識・意欲が弱い学生の

ケースについては、成長の度合いが相対的に低くとどまっている傾向にある。一方で、高校時代からデパートサミットに参加した学生のケースでは、大学入学時にある程度の目的意識や意欲をもっており、大学時代を通じてさらにそれを高め、卒業時には十分な成長を見せている。しかし高校時代からデパートサミットに参加して、引き続き大学でゆにまるに参加した学生のケースでは、強い目的意識・意欲を持って大学に入学してきた学生のケースと比較して、高校当初の元々の目的意識・意欲は高いとは言えず、もし大学から参加した場合には、むしろ目的意識・意欲が弱いまま入学してきた学生のケースと同様に、卒業時の成長は期待することはできなかったと推測される。

このことからデパートサミットとゆにまるの継続的な7年間の高大連携プログラムは、高校時代に大学で学び成長するための準備を行い、目的意識や意欲を涵養することで、元々は学習や地域に対して高い目的意識・意欲をもたない「普通の生徒・学生」が、7年間の継続的な学びの中で十分に成長することができる点において教育的な観点から大きな意義を持つと推測される。デパートサミット・ゆにまるの活動を通じた高大連携プログラムは、将来地元を支える若者を高

校時代から育てることで、地域の人的な潜在力を底上げしていく取り組みであることを仮説として提起し、今後その検証を行いたい。

## 2. 今後の研究課題

今回の聞き取り調査は高大連携プログラムの検証を進めるにあたって、研究の枠組みを検討し、それを仮説として提起することを目的として実施した。しかし、2017年度の卒業生は、デパートサミット経験者が3名と限られたため、個々の事例を一般化することは難しく、あくまでも今後の研究を進めるうえでの仮説の検討と今後の研究方法に関する課題の把握を主に行うこととした。

主な今後の研究上の課題としては、以下のよう整理することができる。

### 1) 聞き取り調査の継続実施と比較検討

今回の聞き取り調査は対象者が限られており、今後数年間にわたり継続的に聞き取り調査を実施する必要がある。また比較検討の観点から、他大学に進学したデパートサミット経験者や専門学校への進学者に関する追跡調査(アンケート等)を行い、松本大学での事例と比較検討を行

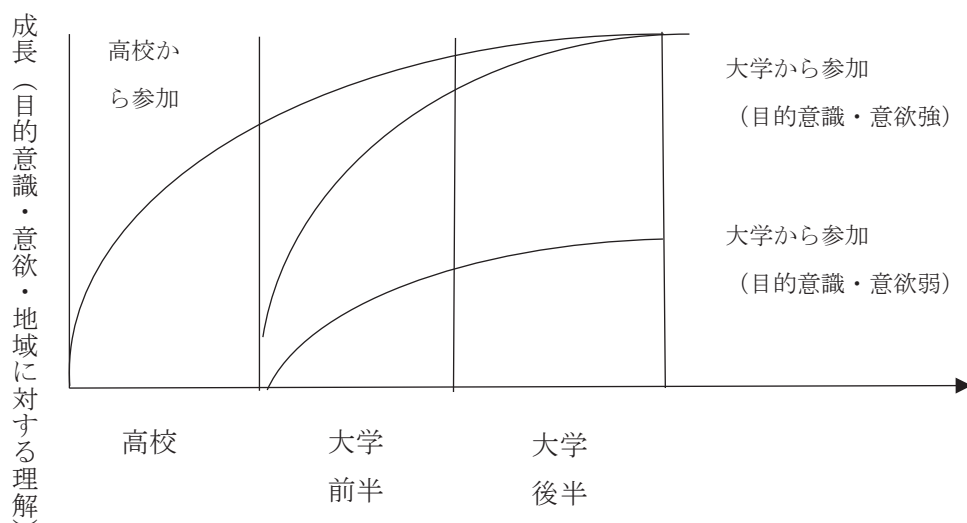


図2. 聞き取りをした学生の成長の軌跡の概念図

う必要もある。そのうえでデパートサミット・ゆにまるによる高大連携プログラムが、汎用性を持つモデルとして評価できるかについても検討を行う必要がある。さらに松本大学の他の学生に関する調査も必要である。すなわち、学生の成長がゆにまるの活動だけによるものなのか、他の大学の活動によるものなのかについては、明らかになっていない。高大連携プログラムがどの程度今回検討された学生の成長に寄与しているかについて比較検討を行う必要がある。

## 2) 高校卒業後に就職した生徒の追跡調査

I. で明らかになったように、デパートサミットに参加した生徒の約6割が、高校を卒業後就職しているが、大学に進学した場合と比較して、地域を支える人材として成長しているかについては、大学教育の役割を明らかにする観点から検討を行う必要がある。

## 3) 大学の教育活動との関係性の検討

高大連携プログラムをより教育効果が高い取り組みとするために、デパートサミットやゆにまるの活動と短大・大学におけるカリキュラムやその他の教育活動との連携について検討を行う必要がある。

## 4) デパートサミット以外の高校の取り組みに関する調査・検討

学習や地域に対する教育効果を図ることを目的としたデパートサミット以外の高校における取り組みについても検討を行う必要がある。今回の聞き取り調査においても、普通高校における地域との連携活動への参加経験が大学における学びの動機づけとなった事例がある。さらに、デパートサミットへの参加と並行して、地域に関わる実践的なプログラムを実施している高校もあり、その成果や高大連携プログラムとの連携の可能性などについて検討を行いたい。具体

的な事例としては、飯田OIDE長姫高校の地域人教育や南安曇農業高校における実践教育、諏訪実業高校におけるSPHプログラム<sup>注10</sup>などを想定している。

## 5) 今後の研究計画について

高大連携プログラムの検証は、2016年度から2017年度にデパートサミットに参加した高校生に対するアンケート調査を実施し、その分析をもとに高校教育におけるデパートサミット事業の意義について検討を行うことから始まった。今回は、松本大学におけるデパートサミットに関わる活動について主に参加学生に対する聞き取り調査を行い、その成果と高大連携プログラムの意義について明らかにすることを目的とした研究に関する中間報告である。2018年度において今回の検証をもとに研究を進める予定である。さらに2019年度以降においては、高大連携プログラムが地域社会に対してどのような意義を持つかについて、実践的な実証研究も行いながら検証を行う予定である。

## 注

- 注1 大野整「松本大学の高大連携教育『デパートサミット』の取り組み－上－」『教育学術新聞』2015年9月16日.
- 注2 松本市ホームページ「地域づくりインターンシップ戦略事業の取り組み」  
<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/smph/kurasi/tiiki/tiikidukuri/tiikiInternship.html>(最終閲覧日:2018.6.22)
- 注3 太田和利・松山敏彦・高橋俊彦「過疎山村に所在する高等学校の存続の条件に関する研究」『農村計画学会誌27(4)』pp.375-384,(2009).
- 注4 富江英俊「高校生の進路選択における『地元志向』の分析」『東京大学大学院教育学研究科紀要(37)』pp.145-154,(1997).
- 注5 大野整ほか「高大連携プログラムの効果に関する検証」『松本大学地域総合研究第18号』p52,(2017).
- 注6 大野整ほか, 同上書, p53.
- 注7 大野整ほか, 同上書, p53.
- 注8 大野整ほか, 同上書, p53.
- 注9 大野整ほか, 同上書, pp.46-48.
- 注10 スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール(SPH)とは、平成26年1月24日付けで文部科学大臣が決定した「SPH実施要項」に基づき行われている事業。事業の趣旨は、「社会の変化や産業の動向等に対応した、高度な知識・技能を身に付け、社会の第一線で活躍できる専門的職業人を育成するため、先進的な卓越した取組を行う専門高校(専攻科を含む)を指定し、実践研究を行う」ものである。諏訪実業高校は、平成28年度より3ヵ年、この事業に指定されている。SPHに関する詳細については、文部科学省ホームページ「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール」を参照のこと。  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/shinkou/shinko/1366335.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shinkou/shinko/1366335.htm)(最終閲覧日:2018.6.22)